

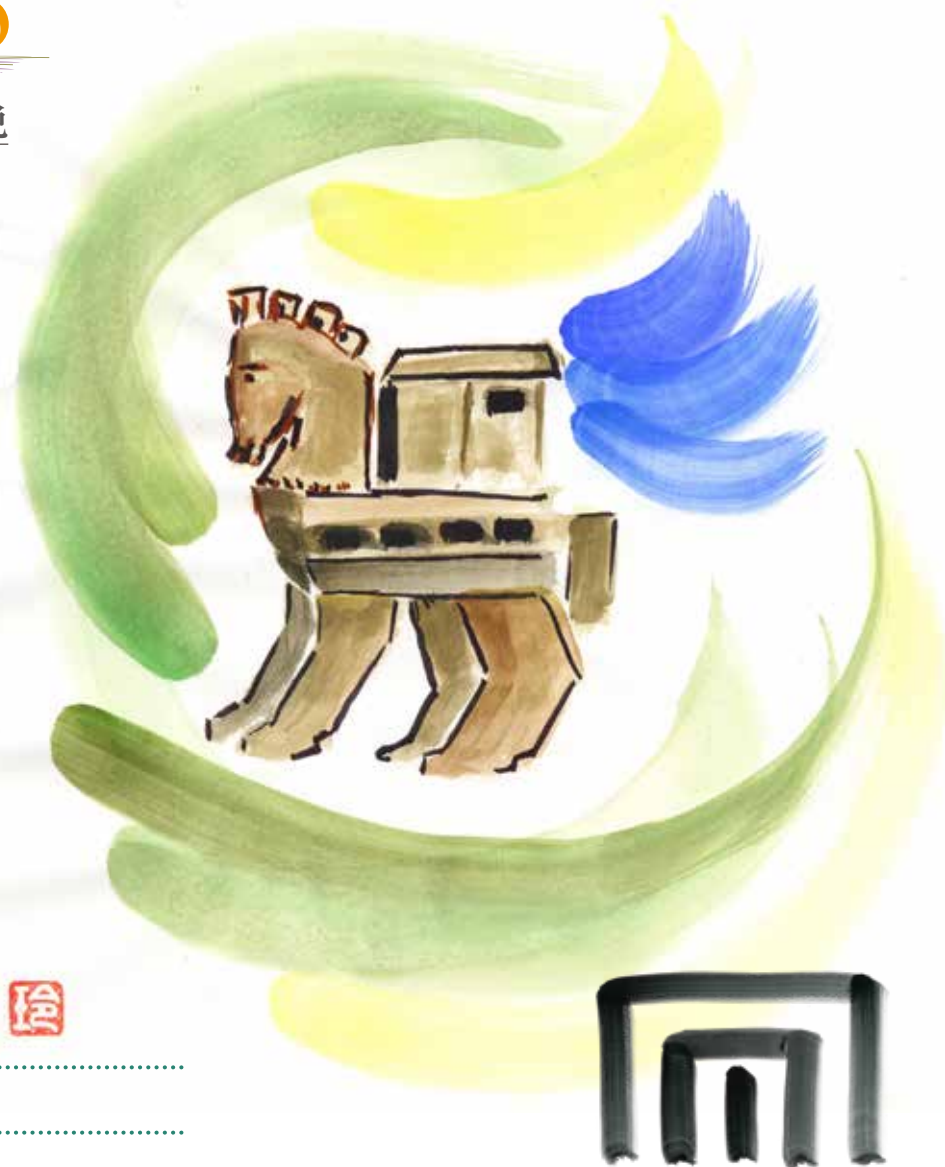
●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 25

見晴台遺跡伝説

伝説
そぞろ歩き

いにしへの
堅穴式に
真木柱
ロマシ求めて
遺跡発掘



今も残る往時の暮らし跡 土器や石器も次々に発掘

笠寺観音の東側に続く笠寺台地上に位置するのが、見晴台遺跡です。1941年(昭和16年)に銅鐸型土製品が発見されて一躍有名になりました。旧石器時代から現代に至るまでの人々の暮らしの跡が残されています。

周辺全体が笠寺公園として整備され、1979年(昭和54年)には遺跡の一角に見晴台考古資料館も開館し、出土品が展示されています。資料館に隣接している観察舎には、堅穴住居のレプリカが展示されていましたが、2013年(平成25年)夏に土台が傾いてきたため解体され、現在修復作業中です。

この地が最も栄えたのは、弥生時代後期から古墳時代初期にかけて。弥生時代には村の周りには、二重に環濠(断面逆三角形をした幅4m、深さ4mの溝)が掘られており、防御的な役割を果たしたと考えられています。1964年(昭和39年)から発掘調査が開始され、その結

果、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての約220もの堅穴住居跡が発見されていて、住居を建て替えながら住んでいた状況が分かります。

古墳時代には遺構・遺物が少なくなりますが、古代以降になると、堅穴住居跡や遺物が多くみつかっています。その大部分は隅丸方形堅穴住居。出土品には弥生時代の高坏形・壺形・甕形・円窓付壺形・円窓付甕形などの土器や、石斧・石鏃・石包丁などの石器類があり、古墳時代以降の須恵器なども発見されています。

江戸時代以降は畑地として利用されていたようですが、太平洋戦争中は高射砲陣地となり、当時の高射砲の砲座が現在でも公園内に残っています。

発掘調査は資料館の開館以後も毎年夏に、市民の参加を得て続けられています。こうした市民参加型の継続的な発掘調査は全国的に見ても珍しいようです。

シュリーマンの着想こそ 伝説そぞろ歩きの原点

ギリシャ神話のトロイア戦争は長い間、伝説、つまり作り話と考えられていましたが、トロイア遺跡を発掘し、実話だと証明した人物がいます。考古学者・シュリーマン(1822～1890年)です。シュリーマンの発掘は、「世紀の大発見」として歴史を大きく塗り替えました。トロイア戦争はギリシャ神話「イリヤスとオデュッセイア」に記されていますが、彼は子供の時に父親が読んでくれたその神話の世界を信じ続け、執念で遺跡の発掘に成功したのです。

人類の歴史は戦争の歴史ともいえ、トロイア戦争が起きた当時、発明された金属の武器である青銅器、そして馬が引く戦車により、戦争は大きく変わりました。馬を使うことでより早く遠くに行けるようになり、金属の武器により攻撃力が増し、戦略的な戦争が可能になったのです。

シュリーマンは1822年、プロイセン王国(現・ドイツ)で誕生。彼の父親はプロテスタントの牧師でした。シュリーマンは若くしてロシアで商売を始め、その後アメリカに渡ってゴールドラッシュに湧くカリフォルニアで商人として成功を収めます。

さらにロシアとオスマン帝国・イギリス・フランス・サルデーニャ連合軍の間で起きたクリミア戦争の時、ロシアに武器を密輸して巨万の富を得ました。

その後、子供の頃に抱いたロマンを諦め切れなかったシュリーマンはフランスのソルボンヌ大学で考古学を学び、トルコ・ヒサルルクの丘にトロイア遺跡があると確信。こ



の丘を買い取ってしまいます。そして、トルコ政府に何度も働きかけ、発掘の許可を得ました。発掘を進めていくと、街の遺跡や遺物が次々にみつき、世紀の大発見として一躍脚光を浴びます。

しかし、発掘の経験がほとんどなかったため、発掘方法が荒く、いろんな時代の出土品を混ぜてしまったりと、問題もありましたが、彼の発掘により、歴史の常識が変わったことは確かです。

子供の頃に聞いた神話を実話だと信じ続け、ついにその証拠をみつけたシュリーマン。ここ見晴台遺跡の発掘も、いにしへの人々の生活を知る歴史ロマンです。時を越えた史実の羅針盤を探し求める、まさに伝説そぞろ歩きの原点ともいえます。



■ 見晴台考古資料館
名古屋市南区見晴台47(笠寺公園内) TEL.(052)823-3200
入場無料：9時15分～17時
毎週月曜・第4火曜休館(祝日は開館)

※次回は富部神社に伝わる高砂山車伝説について特集します。お楽しみに。
■ 写真/Kiyoshi K ■ イラスト/Rei
■ 取材文/Icarus